平成21年度卒業式・学位授与式総長式辞

本日ここに集われた 3435 名の学部卒業生のみなさん、2092 名の大学院修了生のみなさん、そして博士の学位を授与された 659 名のみなさん。卒業ならびに修了おめでとうございます。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々に対しても、ここに深く敬意を表したく存じます。

みなさんは、大阪大学におけるさまざまな専門の勉学と研究を、今日を一区切りとして終え、これから社会のさまざまな現場に出てゆかれます。そしてそのなかでさらに、何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆかれることでしょう。プロフェッショナルへのそういう道に就かれる前に、みなさんが学ばれたその大学を代表する者として、ここにあらためてみなさんに申し上げておきたいことがあります。それは、「教養」と「責任」の意識とをしっかりもったプロフェッショナルになっていただきたいということです。ともに擦り切れるくらいによく口にされてきた言葉ですが、みなさんを送るにあたって、この「教養」と「責任」についてわたくしなりの考えをあらためてお伝えしておきたいと思います。

「オリエンテーション」という言葉があります。この言葉、みなさんは大学入学のときにも聴かれたはずです。大学はどのようなところか、大学ではどのように学び、またどのように課外活動をおこなうか、その仕組みや機会、あるいは手続きなどについて、一通りの説明を受けたことと思います。

「オリエンテーション」というのは、もともと、方向を定めること、つまりいま自分がどこにいるかの見当をつけることを意味しています。そして、生きるということは、とりもなおさず、自分が生きようとしているこの世界のどういう場所にいま自分がいるかを知ることから始まります。世界のなかに自分を位置づけること、つまり世界のなかに自分をマッピングすることからです。何をどうしたらいいのか分からないという状態、つまりまごついたり、途方に暮れたりしていることは、反対に、「ディスオリエンティッド」と言います。方向を見失うこと、自分の位置が分からないこと、そして居場所がないということ、英語でいう「ディスオリエンテーション」とは、そういうことです。

「ディスオリエンテーション」。これはたしかに危機的な状況を意味します。が、それはじつはチャンスでもあります。「ディスオリエンテーション」は、いうまでもなく破局や崩壊への道であるのですが、それは同時に再創造の道でもあるのです。自分のいままでの生き方を根本から変えるチャンスでもあるのです。

赤ちゃんは誕生の際、お母さんの体内でお母さんから臍の緒を通じて栄養を送られていた状態から、自分で呼吸し、栄養をとる状態へと、いのちの仕組みを大変換します。その変換のさなか、つまり産道をくぐり抜けるあいだ、いわば窒息状態にあります。いのちの仕組みを大変換するためには、こうした無呼吸の状態に耐える力が要るのです。

これまでとは違う新しい「オリエンテーション」に至る過程でも同じことが言えます。ここでは当然、以前の「オリエンテーション」はもはや役に立たないのですから、わたしたちは赤ちゃんと同じように無呼吸状態に耐えなければなりません。それに耐えうるだけのタフさがないと、生き方を変えるということはできないのです。

このことは個人としての生き方のみならず、社会的な事業や企業での事業についても言えます。これらの事業にあっても、ゴールまで一直線でたどり着けるものなど、めったにありません。

たいていは途中で何度も挫折するものですし、軌道修正も一回では済みません。もちろん、いったん撤退を余儀なくされることもよくあることです。
このような場面では、いったん立ち止まり、事態を正確に見定めること、自分の正確な位置づけをおこなうこと、つまり「オリエンテーション」が必要になります。この「オリエンテーション」にもっとも必要なもの、それは「複眼をもつ」ということです。一つの光を当てるより二つの光を当てたほうが世界はより立体的に見えてくるのと同じように、一つの事業をおこなうにも、それを内から見るだけでなく、同時に外からも見るほうが、進むべき道がより正確に見えてきます。
「複眼をもつ」ということがどういうことか、〈外〉からの視線をもつということがどういうことか、いま少し詳しく述べておきたいと思います。

一般に、専門を究めるというのは、研究であれ業務であれ、より細かく精緻な領域に入ってゆくということです。みなさんも大学に入るときに学部を選び、大学に入れば専攻を選び、さらに専門の研究課題を選ぶというふうに、関心の対象をより狭めていったはずです。そうするなかで、そのごく限られた研究領域のなかで、世界の先端の研究水準というものを知り、それに合流し、さらにそれを凌駕することに向学心を燃え上がらせたはずです。その筋のプロフェッショナルになろうとして、です。
けれども、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の知識だけではどうにもなりません。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。一つのアイディアを制度として定着させようとするとき、一つの発見を医療の現場で活かそうとするとき、さらには一人の画家の仕事をまとめ展覧会を開こうとするとき、法律や経理、調達や広報といった別のプロフェッショナルたちとしっかり組まなくてはなりません。
別の領域のプロフェッショナルと同じ一つの課題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家（つまりそれについてのまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門についてイメージ豊かに説明することがまずは必要です。そして彼らにその気にならせねばなりません。そのためには、異なる分野のプロフェッショナルたちのこだわりをよく理解し、また深く刺激するような対話をできなければなりません。そうした技を身につけるためには、常日頃から、異分野の人たちと深く交わっている必要があります。将来、医師になろうとしている人、法曹界に進もうとしている人、教職につこうとしている人、研究者や技術開発者になろうとしている人たちが、同じ一つの問題について侃々諤々議論するトレーニングを、日頃よりしている必要があります。じっさい、一つの包括的な視点からすべて論じきれるような問題は、現実にはほとんどないのですから、自分の専門領域の、内輪の符丁でしか語れない人は、そもそも専門家としても失格なのです。
とすれば、専門家にはその知識が「知の総体」のなかでどのような位置を占めるか、いいかえると、みずからの知を社会のより大きな枠組みのなかにいかにマッピングできるかが、強く問われることになります。自分が何を知っていて何を知らないか、自分に何ができて何ができないか、それを見通せていることが「教養」というものにほかなりません。

「教養」というのは、先ほども言ったような「複眼をもつ」ことで身についてゆきます。異文化に学ぶことも歴史に学ぶことも、いまここではない別の場所からいまここを見つめなおすことにつ

ながります。そのような複眼のなかでこそ、世界はある奥行きをもって浮かび上がってくるのです。

この奥行き、それは「価値の遠近法」と言いなおすこともできるでしょう。「価値の遠近法」とは、なくてはならないもの、つまり絶対に見失ってはならないものと、あってもよいけどなくてもよいものと、端的になくてよいもの、そして最後に絶対にあってはならないこと。この四つを、どんな状況にあってもそのつど区分けできるということです。

これから社会のさまざまなセクターで活動してゆかれるみなさんは、予想もしない苦境に何度も立たされるでしょう。そのようなときに生きてくるのが「教養」というものです。それをしかと身につけるため、みなさんの学びはこれからもずっと続きます。そのとき、かつて大学で学んだ多様な学問の方法や世界の見方というものが、あなたがたにもう一つの眼を与えてくれることもあるでしょう。もしさらに学びが必要なときには、いつでも大学に戻ってきてください。大阪大学はそうした学びの場をいつでも開いておきます。

もう一点、「責任」について次にお話しします。

もはや旧聞に属することですが、米国のオバマ大統領がその就任演説の最後のところで、「新しい責任の時代」というスローガンを口にし、「米国民一人ひとりが自身と自国、世界に義務を負うことを認識し、その義務をいやいや引き受けるのではなく喜んで引き受ける機会をとらえること」を訴えたことは、みなさんもご存じでしょう。

「責任」と「義務」。なんとも古めかしい「倫理」の徳目が持ちだされているようにみえますが、この言葉は、1961 年のジョン・F・ケネディ大統領の就任演説を踏まえています。それは「祖国があなたに何をしてくれるかを問うてはなりません。あなたが祖国のために何ができるかと問おうではありませんか」というものです。この言葉によってケネディ大統領は、自分がなすべきことを、自分が何をしてほしいかではなく、自分が何を求められているかというほうから考えようと呼びかけたのです。

オバマ大統領が掲げた「責任」という言葉、英語ではリスポンシビリティ（responsibility）です。ここには日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意があります。リスポンシビリティとは、直訳すれば、リスポンドできるということ、つまり、他者からの求め、訴えに応じる用意があるということです。さらに遡って、リスポンドとはラテン語の re-spondere、つまり「約束し返す」という言葉に由来します。欧米のひとたちは伝統的に、ひととしての「責任」を、他者からの呼びかけ、うながしに応えるという視点からとらえてきたのです。この他者はかれらにとっては神でもありうる。だから職業のことを、とくに使命や天職の意味を込めて、コーリング（calling）と呼びもしてきたのです。まさに神からの呼びだしに応じるということです。

日本語の「責任」にそのような含意はありません。「責任」といえば、国家の一員としての責任、企業の一員としての責任というふうに、組織を構成する一員として果たさねばならない事柄を思い浮かべます。それは匿名の役柄における責任であって、まぎれもなくこのわたしがいまだれかから呼びかけられているという含みはそこにはありません。

考えようによっては、阪神淡路大震災のあと、空前のボランティア・ブームが起こったときにひとびとがとっさに抱いたのは、この、いま自分が呼びだされているという感覚ではなかったのかと、わたくしは考えています。仮設の避難所に遠くから赴いたひとたちは、自分はだれも知らな

いちっぽけな存在だけれど、そして会社でもいつも何をやっても「あたりまえ」、とくに評価されるわけではないけれど、ここでは「ああ、また来てくれたんやね」と、他とは違うこの〈顔〉として認められ、たどたどしいけれどまぎれもなくこのわたしの言葉で話すことができる。ねぎらいあうことができる。そのとき、ひとびとがもしその動機を訊かれたら、「責任」という言葉は持ちだしにくくても、「リスポンシビリティ」という言葉に対応する言葉が日本語にあれば、きっとそれで表現したことでしょう。

もちろん、名ざしで呼びだされている者として自分を意識するということには、危うい面もあります。他のだれでもなくこの自分が何者かからとくに召喚されているという意識が過大なまでに膨らんで、自分を他に優って嘱望された人間、つまりはエリート（選良）と考えて、うぬぼれてしまうからです。あるいは逆に、つねに他人による評価と称賛を求め、ときに卑しいばかりに他人に取り入ろうとするからです。ここでは、このじぶんという意識が方向を誤って、そうオリエンテーションを間違って、他者の否定につながってしまっています。

重要なのは、自分とは異なる他者たちの、声にならぬ叫びや訴えにリスポンドできるということです。他者の消えそうな声を聴く耳をもつこと、その小さな声に“Can I help you?”と応じることができることです。みなさんには、労働者としてでも消費者としてでもなく、聴衆としてでも顧客としてでもなく、一人の「市民」として、そのような鷹揚さ、気前のよさ、つまりは「リベラリティ」を身につけていただきたいのです。

その際に大切なことは、ひとびとのニーズにただちに応えるというのではなく、そのニーズが応えるべきものなのかどうか、そしてわたしたちにとって何がほんとうのニーズであるかを考えつつ応えるということです。そしてそういう判断をするときに生きてくるのが、先にも申し上げた「教養」なのです。

みなさんは一人の個人として、人生においてこれからさまざまな危機に直面しもするでしょう。何のためにここにいるのか分からなくなったり、そもそも自分のような人間がここにいることに意味があるのかと、人生への深い疑問を抱くようなこともきっと少なからずあることでしょう。そんなときほんとうに親身になって応えてくれるのは、もちろんまずは自分の存在を気遣ってくれる友人たちでしょうが、それとともに、同じような困難に直面してきた未知の先人たちの言葉であり、メッセージでもあります。

未知の先人たち、それは、たとえば人としてここにあることの意味を極限にまで問いつめてきた思想家たちであり、同じ時代の過酷な運命を憂え、そして一人でもそういう不幸な人の存在を許すまじと社会の運営に身を砕いてきた企業家たちであり、わたしたちの心をそのもっとも深い部分で慰めてくれる芸術家たちであり、そして市井で無名のまま他のひとびとの困窮を気遣い、無言で支え続けてきた人たちです。そういう未知の人たちの言葉、行為、あるいは作品が、将来、あなたの危機を救ってくれるはずです。みなさんには、大学を離れても、そういう叡智にふれつづけることを忘れないでいただきたいと思います。

そして、みなさんが将来、周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあいつがいたらなあ」と言ってもらえる人になられたとき、そのときはじめて、あなたがたを送りだした大阪大学は、胸を張って、その存在理由を確認できるでしょう。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。